

共に考える道徳授業の試みと反省

～「教師の発問」「つなげる発言」に焦点をあてて～

猪子 夏菜子(長崎大学教育学研究科教職実践専攻)
山岸 賢一郎(長崎大学教育学研究科)

I. はじめに

筆者の関心は、「共に考える道徳授業」を実現することにある。新しく改訂された『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(2015, 7)では、「考え、議論する道徳」へと転換を図るとされている。そこで本実践報告では、特に「共に考える」ということを軸におき、授業の実際に基づいた成果と課題を報告する。なお、「共に考える」ための手立てとして、「教師の発問」や「つなげる発言」に焦点を当てることとする。

まず、ここで報告する「共に考える」とは、どういうことかについて説明しておきたい。「共に」とは、児童と児童、児童と教師を指している。「共に考える」ためには、自分だけでなく他者が必要である。一方通行の自分のみの考えで判断するのではなく、他者の多様な考え方や感じ方にふれ、他者の考えを認めるだけでなく、疑問に思うことを確認したり質問したりすることで自分の考えを深めていく。それが「共に考える」ということである。そうすることで、本来、自分自身の中にある道徳的価値を自覚し、さらにその価値を発展させることができると考える。

『道徳教育の充実に関する懇談会報告』(2013, 12)では、道徳教育について「自立した一人の人間として人生を他者とともにより良く生きる人格を形成することを目指すもの」と述べられている。ここからも、人間として生きるためには他者が必要だということがわかる。さらに、『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』(2015, 7)では、「社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要であり、こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は大きな役割を果たす必要がある」と述べられている。ここでも、道徳教育の要となる道徳授業において、児童と児童、児童と教師が対話し協働していくことの重要性が示されている。

このような理由から、今回の道徳の授業実践においては、児童と児童、児童と教師とが「共に考える」ことで、自分の中の価値を自覚し、さらにその価値を発

展させることを目標とした。「共に考える」ためには、いろいろな手立てが考えられるが、今回は特に「教師の発問」や「つなげる発言」を取り入れて実践した。本実践報告では、それぞれの手立てについての解説と授業の実際に基づいた反省点や改善点について報告する。なお、道徳授業を行った学級は、実習校のA小学校、第6学年（男子6名女子9名）である。実習は、平成28年4月から平成29年2月までで、週に1回のペースで通っている。6年生とは、主に10月からの交流で、今回の実践は11月に行った。6年生での道徳授業実践は一度のみである。

Ⅱ. 教師の手立てについての解説

まず、本実践研究が着目する二つの手立てについて解説する。

1) 教師の発問

筆者はこれまで「どんな気持ち？」などの発問を多く取り入れていたが、その発問だと答えが一言で終わってしまい話し合いが活発に行えていなかった。加藤（2016）は、次のように述べている。「気持ちを問うような発問で子どもたちが使う力は、文脈から読み取る読解力とクイズ的な類推力が中心となる。この類の発問は、初めからある『答え』を読み解いていくようなスタイルとなり、新しい発見をするというよりは、常識的なことの見直しをするという形になりがちである。」（加藤, 2016:39）このような単なる気持ち探しでは、他人事で終わってしまい自分の価値を発展させていくことはできない。そこでまずは、主語や述語を必然的に使って答えなければいけない発問に改善する。そうすることで、問われた児童は、きちんと意味が通るように自分の考えを話そうとする。例えば、「どんなことを考えたのかな？」と問うと、問われた児童は、文章化を試みる。文章を使うとなれば、必然的に5W1H「いつ（When）、どこで（Where）、だれが（Who）、なにを（What）、なぜ（Why）、どのように（How）」を意識するようになる。自分の考えを一言ではなく、よりくわしく話すことで、自分自身だけでなく他者の考えも深められるだろう。それが「共に考える」ことの手立ての一つになり得ると考える。そこで、資料から読みとった登場人物の気持ちを問うだけではなく、登場人物の行為に対する自分の考えやその根拠を問うような発問を意識して、実践研究に取り組むこととした。

2) つなげる発言

「共に考える」ためには、相手の意見を聞き、疑問に思ったり納得したりすることでその意思を伝え合うことが大切である。そのためには、自分の意見を言うのみで終わってはいけない。相手がどんなことを感じて話しているのか、読み取る力が必要である。その手立てとして、児童が発言する前に、先に発言した人の意見と自分の意見とがどのような関りがあるのかを話させるようにした。それが「つなげる発言」である。具体的には、「〇〇さんに付け加えて～」「〇〇さんと

少し違って～」などの言葉を添えて自分の意見を発表するのである。「つなげる発言」をするには、他者の考えを理解する必要がある。したがって児童は、必然的に他者の考えが自分の考えとどのように関連しているかについてよく聞こうとするだろう。この行為は、「共に考える」ということにつながると考える。

今回の授業実践では、いくつかの「つなげる発言」の例を提示し黒板に貼って指導を行った。指導とは、「いろいろな場面で使うよう呼びかける」「声に出して話す練習をさせる」などである。さらに、実習校の担任の先生に協力を得て、2週間ほど他の教科でも「つなげる発言」を児童に意識させ、「つなげる発言」が使えたら賞賛することを継続した。

～ 「つなげる発言」(例) ～

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・付け加えます。・続けて言います。・重ねて言います。・似ています。・感想を言います。・具体的に言います。 | <ul style="list-style-type: none">・別の考えです。・比べて言います。・まとめます。・関連して言います。・ちょっと違う意見です。・質問があります。 |
|---|--|

Ⅲ. 授業の実際

今回の道徳授業を行った学級の児童は、先で述べたように、授業者とまだ深く関わりがもてていない。授業の価値項目は、「役割・責任」である。資料は、『海の勇者』（文溪堂）を使用し、ねらいを、「自分の役割を自覚し、集団のみんなのために取り組もうという思いをもつ。」と設定した。そのために、集団の中で自分の役割を果たすとはどういうことかについて、自分なりの考えを伝える活動を設定した。本稿では、前述したような「共に考える」ことに関わる活動に注目し、授業の実際について報告することとする。

まずは、資料のあらすじを以下に述べる。

嵐にあったアメリカの貨物船フライング=エンタプライズ号のカールセン船長は、乗客と乗員を救命ボートに乗せて避難させた後、船を守るためにただ一人船に残る。嵐と戦いながら、自分自身と向き合い、最後まで自分の役割と責任を全うしようとする。1週間後、救助船に発見されて助けられるが、結局、船は沈んでしまう。救助された船長は、多くの人にその行動を讃えられ、温かく迎えられ、という話である。

自分の命をかけてまで船を守ろうとする行動は、通常では考えられないことで、生命尊重という価値に照らし合わせてもやってはいけない行為である。授業の中では、命はかけるべきではないという前提のもと、船を最後まで守り通そうとし

た船長の姿から、役割を果たすことの意義について自分なりの考えを深めさせたい。日頃、自分の役割を果たしたつもりになっている児童が、この船長の行為にふれることで、自分の中にある「役割・責任」という価値を捉え直すきっかけになればよいと考えた。

授業の展開を下に記す。なお、手立てにつながる「教師の発問」を下線で、「つなげる発言」に関わる事柄を波線で記す。

過程	学習活動と主な発問	予想する児童の反応	指導上の留意点
導入 10分	学習課題を知る (省略)		
	学習課題 : 役割を果たすってどういうこと?		
展開 30分	<p>① 資料を読んで考える。</p> <p>船長の役割とは?</p> <p>たった一人がかじを握りながら、船長は、<u>どんなことを考えているか。</u></p> <p>中心発問</p> <p>カールセン船長は、船長としての<u>役割を果たしていますか?</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・乗客の命を守る。 ・乗組員をまとめる。 ・船を安全に運転する。 ・船を守る。 ・みんなもどうか無事でいてくれ。 ・自分のしたことは間違っていないか? ・絶対に船を沈ませないぞ。 ・家族が心配するだろうな。 ・自分には船長としての責任がある。 ・自分も一緒に避難すれば良かった。 <p>〈果たしている〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなの命を守るために命令した。 ・最後まで(16日間)船を守った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料を読み始める前に、船長の役割について確認する。 ○「船を守る」視点がでないときは教師が伝える。 ○海の嵐の効果音を使うことで、嵐の緊迫感を出し、資料の雰囲気をつかませる。 ○危険性ばかりに意識が向かないように気をつけ、責任をもって自分の役割を果たそうとする船長の思いに気づかせる。 ○乗客や船員の命を守るために、苦渋の決断をした船長の気持ちを考えさせる。 ○<u>つなげる発言を使うように促す。</u> ○ペアで話し合わせることにより、考えの方への糸口をつかませる ○ワークシートに自分の考えを整理させる。

	<p>補助発問</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>なぜ、カールセン船長はここまでできたのだろう。</p> </div> <p>②自分が考える「役割を果たす」ことの意義をシートに書き込む。</p> <p>③学習したことを生かして、自分を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>考えたことをもとに自分を振り返って、今日の授業で思ったことを書きましょう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・つらいけど、続けた。 〈果たしていない〉 ・船が沈んだ。 ・自分の仕事だから。 ・誇りをもっていたから。 ・あきらめたくなかったから。 ・最後までやり通したかったから。 ・きつくても続ける。 ・自分のできることを探してやる。 ・あきらめない。 ・みんなのことを考える。 ・今まで適当にやっていた。 ・周りの人が喜ぶとうれしいので、もっとがんばりたい。 ・つらくてもあきらめないように続けたい。 ・自分ができるとをがんばりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○机間巡視を行い、児童の考えを受容した上で、他の視点の考えがないかを促す。 ○命をかけることは、通常なら無理であるとの確認のもとで話し合わせる。 ○<u>つなげる発言を使っていたら賞賛する。</u> ○<u>教師自身も、児童の発言につなげて補助発問をする。</u> ○学習課題を意識し、自分なりに役割の意義についてワークシートに書かせることで、学習したことがはっきりと分かるようにする。 ○ワークシートに学習の振り返りを記入させる。その際に、学習したことを想起し比べながら自分のことを振り返らせる。 ○振り返ったことを開きあい、様々な考え方に触れさせる。
<p>終末5分</p>	<p>教師の説話をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割をがんばることで、喜んでくれる人がいるんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○低学年の児童が、6年生が役割を果たそうとする姿を尊敬しているということを伝える。

IV. 授業の反省点や改善点

上に示した本時の展開のうち、「教師の発問」「つなげる発言」に焦点をしぼり、「共に考える」ことを軸にして反省点と改善点を述べたい。

1) 教師の発問

中心発問では、「カールセン船長は、船長としての役割を果たしていますか？」と理由と共に問うことで、児童から活発に意見が出るだろうと予想していた。しかし実際は、児童はよくわからないというような表情を見せた。ワークシートに書き込む児童の様子は、不安げでなかなか手が動かない。その後、発表を求めてもぼつぼつと2人が手を挙げるのみである。1人が「果たしている、最善を尽くしたから」、もう1人が「果たしていない、船が沈んだから」と答えた。その後意見が続かなくなり、焦った授業者は、「みんなどう？」「最善ってわかる？」「カールセン船長つらかったよね？」など、児童の発言を待つことができずにたくさんの補足を始めた。録画記録を見ると、児童はさらに困惑した表情を見せている。何をどう答えて良いのかわからなくなったといわんばかりである。どうしてこのような展開になってしまったのか。その原因として考えられることを述べたい。まず、気持ちを問うだけの発問にならないよう気をつけたが、児童が答えたいと思うような発問ではなかったということが児童の様子から考えられる。児童が答えたいと思うような発問をさらに吟味することが大事である。児童が答えたいと思うには、まず発問の意味が理解できなくてはいけない。そして、他人事ではなく自分事として考えるための発問の工夫が必要だと実感した。自分事ならば、児童はもっと深く考えたいと思うのではないだろうか。次に、児童の発言のあとに授業者が焦ってしまった原因としては、児童と授業者との関係がしっかりと築けていないということも考えられるが、児童の発言が出た後に、さらに児童と児童の発言をつなぎ、思考を深めるための「切り込む発問」の準備が足りなかったことにあると考える。

以上のことを踏まえて改善点を述べたい。まず、児童が答えたいと思う発問については、できるだけわかりやすくする必要がある。意味がわからなければ、考えることができず自信もなくなり不安になるからである。そこで、今回の中心発問では、「カールセン船長は、船長としての役割を果たしていますか？」であったが、「あなたが船長ならどうしますか？」と発問したらどうであっただろう。一気に自分事となり、自分と向き合っているのではないだろうか。これまで授業者は、資料に出てくる人物の気持ちを問う授業ばかり行ってきたが、それでは間接的で他人事となり、答え探しのようになることが多かった。そこで、「指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること」(小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編, 2015, 7) とあるように、問題解決的な学習を仕組むのである。「あなたが船長ならどうしますか？」と問うことで、児童は解決策を探そうとするのではな

いだろうか。ここでいう「問題解決的な学習」とは、児童が課題に出会ったとき、自分ならどうすべきかを考えることで、自分の良さや改善点などが見えてくるというような学習である。今回の授業でも、「あなたなら？」と問うことで、問題解決的な学習が仕組めたのではないかと考える。自分のことなので考える意欲も増すだろうし、他者がどのように考えるのか気になるので、話も聞こうとするだろう。そうすることで、「共に考える」活動に近づいていくのではないか。

次に「切り込む発問」についてだが、授業者がどのように切り込むかと考えるのではなく、児童のどの発言に注目するかということに視点をおいてはどうだろうか。児童の発言で疑問に思うところやわからないところに切り込んで問うことで、児童は自然とその発言についてさらに掘り下げて考えないか。つまり、授業者がもともと「切り込む発問」を考えておくのではなく、出た児童の発言に切り込むのである。例えば、「〇〇さんの意見ってどういうこと？」「〇〇さんと〇〇さんの意見ではどこが違うのかな？」などと問うことで、他者の意見についてさらに深く考えられるのではないだろうか。

以上が、「教師の発問」に関する反省点と改善点である。

2) つなげる発言

録画記録を見ると「つなげる発言」で使われていたものは、「似ている発言」と「違う発言」のみで、その他の「つなげる発言」は見られなかった。その理由として考えられることは、児童が使えるものがこの二つに限られていたということである。事前に「つなげる発言」の指導を行ってはいたが、どの場面で使えるものなのかなど、時間をかけて継続して指導することはできていなかった。このことから、「つなげる発言」の指導では、段階を追いながら使える場面を設定し練習していく必要があると考える。また、「つなげる発言」を具体的に指導していくためにも、教師自身が「つなげる発言」をきちんと整理し、分類する必要があると考える。例えば、「付け加えます。」「続けて言います。」「重ねて言います。」は、どれも、他者の意見を肯定し深めていくのに有効である。また、「似ています。」「別の考えです。」は、両方とも自分の意見と比べることになるので、「比べて言います。」に含まれているとも考えられる。「比べる」ということは、前の意見と自分の意見を比べることと、たくさんの意見の中から選んで比べることの、両方の意味があると考えられる。前者は、自分の前に出た意見に直接「つなげる発言」であるのに対し、後者は、たくさんの意見の中から選んでそれらを「つなげる発言」だといえるのではないか。

次の反省点としては、時間の問題があげられる。録画記録を見ると、「つなげる発言」をすることで児童の意見が少しずつつながってきたように感じられるが、それと同時に時間がかなり使われていることがわかる。そのため、自分を振り返る場面では、十分な時間の確保ができなかった。話し合う活動を充実させたいが、どこの時間を短くするかについては検討する必要がある。

以上が、「つなげる発言」の枠組みに関する反省である。では、授業の実際ではどうであったか、中心発問場面の様子を図1に示す。

C1	責任を果たしていると思います。理由は、結果的に船は沈んでしまったけど、沈まないように最善の行動をとったと思ったからです。
T	最善ってどういうこと？
C1	最もよい行動。
T	みんなどう？
C2	付け加えます。私は、責任を果たせたと思います。船は守れなかったけど船員の命は守れたからです。
C3	少し違います。完全には、役割を果たせていないと思います。命を守るという役割は果たせたけど、船を守るという役割は果たせなかったからです。
C4	違う意見です。役割は果たせていると思います。なぜなら、危険な状況でたった一人残ってみんなを守ろうとしていたからです。

図1 中心発問場面の会話

児童は意識して「つなげる発言」を使っているが、前の意見と同じか違うかの認識だけで終わっている。ここで、どんなところが違うのかを問うことで、児童の考えをさらに深められたのではないだろうか。C1とC2とC4は同じような考えで、「船は守れなくてもその過程でやれることを精一杯行えば、責任を果たしていると言える」と、考えている。それに対し、C3は、「結果が大事で、船を守れなかったのだから責任は果たせていない。」と考えている。しかし、このC3は、授業後に図2のような振り返りを書いている。

私は最初、役割を果たすということは最後までやりとげることだと思ってきました。でも、他の人の船長は役割を果たすために努力したというような意見を聞いて、役割を果たすということは今やれることを精いっぱいやることだと思いました。今、やっている仕事もゴールだけを指すのではなくて、その道のりも大切にしていこうと思います。

図2 C3児童の振り返り

・自分の考えをすんで話したが、	○
・自分の考えをすんで書くことができたが、	◎
・自分の考えをすんで書くことができたが、	△

図3 児童Aの反省

この振り返りから、C3は、他者の意見を聞いて、自分のこれまでもっていた価値について振り返っていることがわかる。結果が全てであるとの価値が編み直され、結果だけではなくその過程も大切にしていこうとすることが役割を果たす

ことだ、と自分の中で整理できている。しかし授業後の振り返りで、友達のことをしっかり聞けなかったと反省している児童が、15名中2名いたことから、「共に考える」ことが十分にできていたとは言い難い。(図3)

以上のことから「つなげる発言」の整理や分類については、上で述べたように、授業者自身が明確に理解した上で児童に伝え、段階を追って使えるようにすることが大切である。また、つなげる意識については、学級活動の中での遊びや話し合い活動を行っていく上でも培うことができると考える。時間については、導入場面とワークシートに書き込む場面に時間をかけすぎている。書き込むという作業については、素早く書けるよう日頃から児童に慣れさせておく必要がある。練習することで素早く書けるようになるのではないかと考える。また導入場面では、児童に答えさせるところをしっかりと把握し、時間をかけすぎずに学習課題にたどり着きたい。さらに新たな視点として、「つなげる発言」と「つなげる発言」をつなぐ「教師のつなぐ発言」「切り込む発問」もこれに含まれるだろう)について考察していく必要があると考える。

V. 結びにかえて

本実践報告では、実践前と実践後の児童の変化についてくわしく分析することができていない。今後は、実践前と実践後の児童の意識調査を行うなどして、さらに改善点を見出し、それを踏まえて、再度授業実践を試みたい。

本実践報告は、「共に考える」ための手立てとして、「教師の発問」や「つなげる発言」に焦点を当て考察してきた。「共に考える」という視点でみたとき、①児童が考えたくなる発問にする、②安心して話し合える学級の風土をつくる、③じっくり話し合う時間を確保する、④発言をつなげるための教師の手立てを考えるなど、改善する点は多くある。とはいえ、図2の児童のように、自分の中の価値を自覚し、さらにその価値を発展させるという姿が見られたことも事実である。それは、「共に考える」手立てをうった成果の一つといえるのではないだろうか。この実践をさらに深めていくことで、「共に考える」授業をつくっていききたい。

〈参考・引用文献〉

加藤宜行 (2012) 「道徳授業を変える教師の発問力」 東洋館出版社

加藤宜行 (2016) 「一期一会の道徳授業」 東洋館出版社

坂本哲彦 (2014) 「道徳授業のユニバーサルデザイン」 東洋館出版

田沼茂紀 (2014) 「新しい道徳授業」 学研

中央教育審議会 (2014) 「道徳に係る教育課程の改善等について (答申)」

文部科学省 (2015) 「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」

柳沼良太・山田誠 (2016) 「小学校問題解決的な学習で創る道徳授業」 明治図書